

女子部

この1年を振り返って

女子部部长 更科幸一

別学最後の1年となった2023年度は、新型コロナウイルス感染症が5類感染症へ移行し、4年ぶりにコロナ禍以前の生活に戻った場面も多くあった。

今年度1年を通して、女子部でのキーワードは「最後の女子部」だった。特に高等科の委員、中でも高等科3年の委員長が中心となり「温かさ」「優しさ」「つながり」を大事にしていた。

また、生活の中の一つひとつのことに、丁寧に取り組む姿勢が見られた。これまで女子部で行ってきたことの意義を問い直している人も多かったように感じる。学園では、日常の中で、全校に向けて報告をする機会が多いが、そうした意義などについても、言語化して伝えている人もいた。

一方で、女子部の生活そのものが、生徒自身のアイデンティティとなっている場合もあり、生活が良くできる人が素晴らしい、という価値観があり、健康面や精神面でも、そのようにできない人たちが苦しい思いをする状況もあった。

1. コロナ禍を経て

23年5月に、新型コロナウイルス感染症が5類感染症へ移行したことで、生活の中での様々な制約が解けた。礼拝、食事など、全校で集まっていた時間は、実に3年ぶりにまた全校で集まることを再開できた。野の花祭も、前年度まで、保護者のみ来校可など、段階的にオープンにしていたが、フルオープンで一般の方にも来場いただけたのは久しぶりだった。

高等科2年以上の生徒は、コロナ禍前の女子部の生活を体験していることもあり、自分たちがその文化を下級生に伝えたいと、継承のために踏ん張っていた部分はあったと思う。

2. 共生共学化に向けて

一方で、次年度より始まる共生共学化に向けて、様々なことを生徒自身が決めていく1年でもあった。中心となって考える生徒が係として本当によく頑張っていた。特に、様々な場面で必要となる話し合いについて、プロのファシ

リテーターの方から教えていただきながら、よりよい方法を考え、進めていた。中でも委員会については、23年度内から初代が始まるため、最初にどのような組織にするのかを考える必要があり、そこからスタートした。

係が中心となって、いくつかの案を考え、それを全校に諮る、という方法をとると、反対意見も出る。ただ、そうした意見が出たときに、相手を否定せず、一度受け止めてから、よりよい形をお互いに考えていく、という「対話」の姿勢が見られるようになった。ワールドカフェでの「相手を否定しない」という1つだけのルールを大事に、話し合いをしていくこと、苦野一徳さんから「AとBの意見が出たときに、お互いでCをつくりだしていくには」といったことを、丁寧に教えていただいたが、それらを学んだだけではなく、実際の話し合いの場面で体験できたことは大きかったのではないかな。

とはいえ、全校で話し合いを進める際には、こうした係に向けて時に強く反対意見を言う生徒たちももちろんいた。大人は両者が落ち着いて考えられるようにケアをしていた。こうしたことも含め、生徒たちからは「誰かが決めてくれたほうが楽。それに従っているほうが楽」という意見はよく出ていた。対話によって社会を形成していくことの苦勞を感じたからだと思う。ただ、こうした経験こそが、将来一人ひとりが社会に出たときに、その構成員の一人であることを自覚し、自分ごととして社会課題に取り組んでいくことにつながるのではと考えている。

3. 共学化へ向けての教員の準備

24年度からの共学化へ向けて、教員の準備も大詰めとなった1年だった。部長・副部長を中心に、全体を見てどのような課題があるかを考え、毎週水曜日に3時間ほどそのための話し合いをし、プロジェクトのテーマを決めていった。「職員室をどのような環境にするか」「共生社会をどうつ

くるか(男女の交わりについて)」「身だしなみ」「服装(25年度からの式服)」「中高のつながり(キャンパスが離れる中での交流)」「連絡ツール」「対話の係」「デバイス」「教室、クラス編成」などのプロジェクトを立ち上げて話し合いを進めてきた。プロジェクトチームは、中高でグループを分けた。

生徒も教師も、「各部最後の1年」と翌年度からの「共学化1年目」を、どうすればよいものにできるか、真剣に考え、対話を重ねた年だったと思う。